

四、家族や国民の皆さんに遺したいことば

帰国後約半年くらい、私は栄養失調症や抑留疲労のための静養をしましたが、父の家業である織物業（甲斐絹や洋服地等）に専念し、工場を経営して祖国再建のためにと頑張り通しましたが、どんなに仕事が苦勞な時も、シベリアの抑留生活を思えば「このくらいのことだ」と頑張ることができました。また、シベリアで亡くなった戦友の慰霊や遺骨収集のため全国強制抑留者協会に加入して、コムソモリスク、イルクーツク等の墓地調査（調査班長渡辺時雄氏）に参加しました。

今こうして苦しかったシベリア抑留時代の報告記を書き終わったとき、ぜひ、私の子孫や若い国民の皆さんに遺しておきたいことばがあります。それは「平和」の一言であります。世界中の人が平和を愛し、二度と再び戦争をなくし、我々のような犠牲者を出さないようにして下さい。

そして家中仲良く、よく働けば家も安泰で栄えることでしょう。

以上、お願いし、私の抑留労苦の報告を終わります。

強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県 渡 辺 龍 三

私は、大正十二（一九二三）年二月十日、霊峰富士山麓で出生、東京通信講習所を卒業後郵便局に勤務中、昭和十九（一九四四）年一月五日、現役兵として東京麻布近衛師団東部第一六部隊（通信隊）に入隊、直ちに満州国錦州第二七師団付通信隊に配属され、錦州付近の警備に当たりながら師団の通信勤務に従事しておりました。

一、ソ連攻撃からシベリア抑留まで

昭和二十年八月十日、私どもはソ連、満州、朝鮮、三国国境の琿春山岳地帯に展開した第一一二師団司令部の暗号解読通信隊として琿春司令部の

陣地内に戦闘配備完了、ソ連兵南下の暗号通信を受け、これに応戦すべく山岳陣地にざんごうを掘り対戦車攻撃班を編成して待機したが、十一日の未明、部隊上空にミグ戦闘機に誘導された爆撃機三機が照明弾投下とともに琿春駅や市街地に爆弾投下、友軍飛行機の迎撃はないまま琿春駅などほとんど破壊された模様であった。我々部隊は山岳陣地に展開したままで八月十五日正午、天皇陛下の終戦の詔勅を聞くこととなりましたが、私ども通信隊はこのときは暗号でなく、陛下の玉音をそのまま傍受することになり、部隊長や司令部将校は涙を流し「まさか日本が敗戦するとは、信じられない。とにかく関東軍司令官の命令が下るまで我々はこの陣地を死守する。それまで今日の詔勅は厳秘とする」と、きつい命令であった。

私は、日本軍隊は建軍以来不敗の軍隊であるが、魂では負けないが、米ソ等連合軍の物量に負けたのだ。戦いに負けた日本国や我々軍人にはどんな運命が待っているだろうか、不安のまま露営

の陣地を守っていたが、八月十七日部隊長命令で、山岳陣地を撤収して下山、琿春街に出ると飛行場内に集結させられて武装解除。武器どころか、時計、万年筆、武運長久のお守りまで「ダワイ、ダワイ」とはぎ取られ、その場で収容所にぶち込まれてしまった。

困ったことに、野戦展開のまま収容された私どもの部隊約五百人くらいは携行食は皆無、ソ連軍に交渉の結果、大豆袋が配給されたので、飛行場の泥水を汲んで一日一回豆煮スープを作って飢えをしのいだ。それでもその当時ソ連の軍人は「日本軍はポツダム宣言でウラジオから東京ダモイ（帰る）だ、近くのシベリア鉄道まで徒歩で行くのだ」と我々に希望を持たせ、生きて日本へ帰るのだ、とだまし始めた。若くて純粋な軍人だった我々は、ソ連の「ダモイ」の言葉を信じ、琿春から峠を越し金蒼国境からソ連領クラスキーまで一週間も野営をしながら徒步行軍し、クタクタになりながらシベリア鉄道駅までたどり着いた。

クラスキー駅で牛馬輸送用の貨物車に押し込められた私どもは「東京ダモイ、ダワイ、ダワイ（早く東京へ帰るのだ）」とせき立てられて車中に入れられ、そのまま三日三晩を北上、着いた所はなんとアムール河の岸辺に広がる大きな街、聞けばシベリアの中央部の新興都市コムソモリスクであった。

あとで知った話であるが、コムソモリスク市はシベリア鉄道駅もあり、アムール河の軍港もあり、国際飛行場もある要所であることから、スターリンはシベリアの「軍事拠点都市」とする五年計画を樹立し、その要塞や軍港、ダム建設、火力、水力発電所施設、戦車、自動車製造工場の建設などの労役に我々捕虜を使うためにスターリンの特命でここに連行されたのであった。

二、収容所生活と必死のノルマ遂行

私ども師団通信隊は第一二師団の兵員を主力とする千人単位の作業隊に編成されて、十月初め

ごろコムソモリスク市郊外の第二収容所に入れられた。隊舎はれんが造りの古い半地下式の大きな建物で、真ん中に通路があり、両側に二段ベッドがあつて一区切りに二十五人ずつ詰め込まれ、一棟百人が寝起きした。両側の入り口付近にドラム缶式のペーチカがあつて一晩中まきで採暖した。何しろシベリアの冬は零下四〇度にも下がり火を絶やすことができず、部屋じゅう真つ黒な塵煙、朝起きてみると戦友の顔まで真つ黒け「おまえは誰だっけ」と笑えない会話が交わされた。

食糧は満州から略奪してきた雑穀（大豆、コウリヤン、アワ等）と少々の黒パン。したがって毎日大豆スープやコウリヤン粥、やむなく野草（フキ、アカザ、ヨモギ）の食べられるものは岩塩で煮て食べたが、空腹の上に仕事はれんが作りとか石炭の貨車おろし、倉庫処理等の重労働、それが理屈にも合わない巨大ノルマで、日本人の体力では五〇%の成果が精いっぱい。「働かざる者は食うべからず」の共産主義社会の組織の中で地獄の

苦しみをしました。

その中で、夏になると、コムソモリスク市の郊外にコルホーズ（集団農場）があり、その仕事に駆り出されて農作業や牛馬の草刈りなどにロシアの地方人と一緒に働くことができた時が一番楽しく、みんなこの労働作業中死んでたまるか、どんな苦勞しても生きて故郷に帰って、父母や兄弟の顔を見てから死にたいものだと言奮したものです。

困ったことに衣服は着たままで、冬になるとソ連製の羊の外套と手袋、カートンキという長靴の支給があったのでどうにか冬が過ぎせたが、中には破れた軍靴で長時間の雪中作業で凍傷にかかり片足切断の戦友も出ました。風呂は三カ月に二回くらい街中のバーニヤ（お風呂場）に行くだけだったので、シラミが多く発生したり、赤痢とかチフスの伝染病が出て苦勞しました。

昭和二十二年夏ごろになると収容所生活も整い、私どもも街中の労働にも慣れてきたので、れ

んが焼きも、粘土掘り、運搬、焼窯入れ、火回り監視、焼上品運搬等流れ作業方式で、日本人が一貫作業班を編成して工場のすべてを経営するようになり、また街中での建設工事も設計書に従って日本人が施工一切を行うようになったので作業の手順も仕上がりも順調になり、ノルマも一グループ（十五人）一〇〇%から一二〇%も上がるようになり、渡辺グループ、渡辺中隊はハラショー組（良く働く組）だと誉められました。

収容所生活中、労働に対する給料は一円の支給もなく、栄養失調症の戦友もパンを食いたいと叫びながら隣に寝たまま眠っているうちに静かに死んでいきました。私の収容所では三百人くらい栄養失調症で死んだものと思います。

三、抑留中の統制管理と洗脳教育

私どもの作業隊では、入その後昭和二十一年春ごろまでは旧軍編成のまま、将校が中隊長、下士官が作業班長でしたが、民主化運動が始まり、ソ

連式の洗脳教育が激しくなるにつれて、将校は別の収容所に移され、アクチーブという「民主化委員会」が収容所を統制し、作業班長などもその成績優秀者が抜てきされるようになり、作業場に活気が出てきました。

私どもとしては、とにかく生きて帰国するまでみんなでどんな苦労にも耐え抜くのだ、希望を失ってはならないと励まし合ったものでした。

私とて終戦から一年くらいは生きられるかどうか自信がなかったが、次第に環境になれてから、何が何でも生きて日本に帰りたいと思い込んで生死の境を乗り越えてきたと今でも思い返しています。

最後に、私は極限状態のとき、自分の心身を支えた工夫として、無駄な労力を使わないことと、作業所の人たち（トルコ人だった）と仲良くし、その人達から時々大豆とかパンを恵んでもらったり、また昼食時に箸を作って大豆をつまんで口に投入競争をするとか、心を慰め合って生きる喜び

を持ち続けることができました。

四、日本ダモイと今生きている感動

昭和二十二年十月ころ、コルホーズの農場長が私ども作業員に対して、ソ連は日本人捕虜のうち病人とハラシヨラポーター（よく働く者）から帰国させることになったと話をしてくれたが、事実私どもの収容所からも病弱者十人くらいが入院だといって日本に帰されたいとのうわさが立ったが、真偽がわからず、昭和二十三年の春までダモイの話は絶ち消えて苦しい冬の労働が続いた。忘れもしない六月初旬、例のアムール河辺のコルホーズでバレイシヨまきに汗を流していたとき農場長が「渡辺、喜べ、今度は東京ダモイだ、今日で農場作業は終わりだよ」と知らせてくれた。まさかと思つて収容所に帰ると収容所は大騒ぎで、帰国準備だといつて私物検査、こうなつたら生命だけ持って帰れば他は何も要らない、と紙一枚まで取り上げられながら夜中の汽車に乗せら

れて一路ナホトカ港に着いた。

ナホトカでは第一收容所（ダモイのため資格審査）、第二收容所（日本革命の戦士としての補備教育）、第三收容所（民主運動を理解し共産社会と仲良くするという思想高揚教育）の教育課程を約三週間みっちりと言詰め込まれたが、私どもはそれこそ必死になつて勉強した。

これが地獄脱出の最後の責め苦だと思つて歯を食いしばつて頑張つたかいあつて、私たちの帰還隊は昭和二十三年六月二十七日「信洋丸」に乗船、同三十日無事舞鶴港に上陸。日の丸の旗を振つて祝つてくれる日本婦人会の方々の「皆さん、お国のために長い間の御苦労ありがとうございます」と温かく迎えてくれる声に涙があふれ出たのを今でも覚えてゐる。

舞鶴港では我々抑留者はDDTを振りかけられたり防疫注射をされたり、ソ連抑留中の情報を聞かれたりした後、復員手当として一金八百円ばかりいただいたので、この金で家が建つぞと思つて

喜び立つたが、壊れた眼鏡を修理してもらつたら二百五十円も取られたのにびっくりしました。

復員帰郷後、私は休職中だった郵政事業（局長）に復帰し国家再建のために一生懸命働き、本日まで健康に恵まれて生きてきた感激を忘れずに働き続けています。

五、家族や国民に言い遣したいことは

1. 戦争は絶対にしないこと。
2. どの人達とも仲良く心を開いてお付き合いをしよう。
3. 健康第一に心がけ、思いやりを大切にしよう。

六、今でも忘れられない悲惨な情景

1. 武装解除から入ソ途中の峠路で路端に転がっていた襟章が伍長の首なしの遺体。
2. 山を切り開いた谷間の軍用道路で人馬入り乱れて折り重なっている上をソ連戦車のキャタピ

ラーで踏みつぶされていた光景、その道の側を敗戦して行く先も分からず黙々と歩かされる私ども日本兵の姿（満ソ国境琿春峠）。こんな事が二度と繰り返されないためにも平和な世界をつくって下さい。

抑留記

長野県 中村 良 恵

私は大正十二（一九二三）年十月五日、長野県伊那市に生まれました。

昭和十九（一九四四）年一月十日、現役兵として東部三八連隊に入隊。同月中に北支隊六三師団独立歩兵第二五大隊第三中隊に配属、初年兵教育を受けました。四月より河南作戦参加後、師団は二十年五月に満州に移動するまで河北省全域にわたり移動討伐作戦に参加していました。部隊は満州の通遼に移動しましたが、すぐ承德作戦（万里

の長城内外）に参加。その間の八月八日にソ連軍の進攻を知りました。二日間の強行軍で承德まで出て、そこから汽車で錦州まで行き、日本人学校に入りました。

八月十五日正午、全員整列があり、玉音放送を聞きました。意味は雑音で聞き取れず、部隊は出動命令が出て、汽車で奉天（瀋陽）まで北上して貨物廠に入りました。四日後、ソ連兵が入ってきて、ここで武装解除され、北陵大学に集結させられました。ここには何万人も集められていました。九月初めから千人単位で貨車輸送が始まりました。九月末ごろ黒河に到着、十月初めに対岸のブラゴエシチェンスクに渡りました。再度貨車で移動し、一週間くらいと思いますが、バイカル湖を右に見て着いた所は炭坑の街チェレンホーボというところでした。駅に近い収容所に入りましたが、そこは三千人くらい入っているようでした。

数日後から作業が始まりました。石炭の露天掘りです。三十人くらいの組で一鉱区昼夜三交代